

葉貫磨哉氏を偲ぶ

芥川龍男

葉貫氏と最も長いつき合いは、墨田区の文化財保護審議会におけるものであった。平成二年審議会会長菊池勇次郎氏（大正大学教授）が逝去され、私が会長に推されたときに、仏教関係の委員として葉貫氏が委員に加えられるようになった。委員会は隔月に開催して、区指定文化財として指定・登録・維持管理等について委員会の意見をまとめて答申するのが任務である。

寡黙でシャイな彼も、こと仏教関係になると、滔々と意見を開陳され蘊蓄の深さを感じさせるものがあつた。そのときの彼の顔面は紅潮して行くのである。委員会が終わると、吾妻橋を渡って浅草駅前に来ると、彼は「観音様にお参りに」といって飄々と仲見世の方に消えていくのが通例であつた。ナップザックを肩に、帽子を少しアミダにかぶっていたのが印象に残っている。私には彼の師であつた故玉村竹二先生のおもかげとダブって見えた。師に迫る禅宗史の研究に没頭してきた彼が、その風貌まで似てきたことを目の当たりに見た思いがした。

私は下戸なので、彼と飲みに行ったことはほとんどない。それでも一・二回のつき合いがあつた。いずれも審議会の帰りで、メンバーの吉原健一郎氏（成城大学教授）と連れだつて吾妻橋たもとのビヤホールであつた。私は小ジョッキ一杯で真っ赤になつているのに、葉貫・吉原のご両人はよもやま話に弾んでいる。葉貫氏は目元をゆるませて談笑しながら杯を重ねていた。そのとき気がついたのは、葉貫氏の話し振りが少しばかり巻き舌になっていた。程よく飲んで吾妻橋を川風に吹かれながら浅草駅に向かうとき、葉貫氏はいつものようにナップザックを肩に、帽子を少しアミダにかぶって私の前を歩いている。その飄々

とした全くの自然体でゆっくりと歩く後ろ姿に、名状し難い感動を覚えた。それは悟道に達した禅僧を実感させるものであった。

昨春になって、七月に控えた任期切れを前に審議会長を彼に交替してもらおうと打診したところ、学内の委員会が忙しくなるので断られてしまった。身に覚えのあることであるが、いずこの大学も定年ぎりぎりまで何らかの委員として結構忙しいものである。無理も言えないので「くれぐれも身体には気を付けて下さい」といって電話を切った。今にして思えば、彼と声を交わしたのはこれが最後であった。案の定大学の方が忙しくその後審議会の欠席が続き、秋には会えることとと思っていた。その時には先輩づらをして、定年後の健康管理などについて話したいものだと思いつつ日を過ごしてしまった。年内には会えると思っていたところに、思いもよらぬ訃報であった。知らせる広瀬良弘君もやりきれなかったであろう。私も絶句してしまい、葬儀の日程をメモするのが精一杯であった。少年時代に四七士の墓に詣でた泉岳寺での葬儀に参じ、本堂の一角で瞑目しながら彼との別れのひとときを過ごした。

今はただ、彼の遺偈「有生有死 仏界一輪 六十九年 心骨清涼」を折に触れてわが心の糧にしてゆく所存である。

合掌